第４項　中学校（神戸市長田区）　校長（男性）

この校長先生は，現在は神戸市灘区のＸ中学校にて勤務されているが，地震が発生した1995年１月当時は，長田区にあるＤ中学校におられた。市街地内の小規模な中学校である。そして，震災後の混乱期を乗り切られた後，同年４月に現在のＸ中学校に移られたという。

地震発生から避難所の開設まで

Ｄ中学校では，ふだんから学校のすぐ近くに住む民生委員に学校の鍵（門だけでなく，職員室も含む）をあずけている。地震が発生した１月17日も，その人と元ＰＴＡ会長が，早朝に開錠して職員を待っていた。校長も，自宅（他区）の自宅の被害が比較的少なかったことから，すぐに学校にかけつけ，17日の朝７時45分頃には到着した。すでに体育館には避難者が入っていた。校舎の方は被害が大きく，避難者は入っていなかった。運動場にも避難者がいたが，シンとした状態だった。校舎が危険で，入るのが怖かったのだろう。なお，Ｄ中学校の体育館は，変則的だが隣接するＹ小学校の校舎の２階にある。Ｙ小学校は震災の前年に校舎を新設しており，そのためもあって，学校のすぐ近くの人はＹ小学校の方に避難していた。Ｄ中学校に避難してきたのは，後から考えると，校舎が古いことをよく知らない，もう少し遠く離れた場所に住んでいた人たちだったようである。　こうして震災の初日から，学校は避難所となった。以後，教職員25名全員が，校長・教頭の指示のもと，避難所の運営にかかわった。校長自身は３月末でＸ中学校に転任となったため４月以降の経緯の詳細は知らないが，最終的には２学期なかばまでの長期にわたり，校内に避難者が生活する状況となった。

避難所の組織化に向けた動きと運営の形態

地震が発生してから最初の１週間は，ほとんど教職員のみで走り回っていた。教職員は来られる人から学校に泊まり，動き出した。最初，校舎の危険個所に貼り紙をして，校区を回って生徒の安否確認をした。これには３，４日を要した。並行して避難者を把握しようとしたが，名簿づくりはすぐにはできなかった。情報を得ることに全力を注ぎ，食料，水の確保，トイレ（プールがなくて水が使えず，校庭に穴を掘って仮設トイレにし，次々埋めては掘ってつくった），寒さ対策で暖をとるなど，組織的ではないが職員が腕章をつけて役割分担をした。そうすることで，避難者と教職員との人間関係ができたように思う。避難者自身による組織は，努力したがなかなかできなかった。高齢者が多く，またお互いに住所が近所でないため顔見知りでない人も多かった。それで，落ち着くまでは職員主導でやる，ということにした。避難者の自立を促したがな

かなか反応がなく，物資や情報の効率的な伝達に必要であることを話し，やっと４週目になって班を編成することができた。班長を決めて，定期的に会議をするようになった。なお，後では学校から見える範囲の公園のテントにいた人たちも組み込んで，計12班となった。Ｄ中学校の近くにはテント村ができており，配給物資を取りに来たりして問題になったことがあるのだが，校内の人もテント村の人も基本的には同じだと考えたからである。Ｄ中学校のある地域は，いわゆる「都市内の過疎化地域」で，避難者には互いに気遣い，助けあう雰囲気があった。ただ，避難者の年齢や地域構成のゆえもあろうか，自分たちで自立してやって行こうという意味での積極性には，やや欠けていたかもしれない。

外部の人たちとの連携・協力

外部との連携としては，まず地域の人（ＰＴＡのＯＢ，町内会など）が，自発的に助けに来てくれた。区役所からも２週目には３人が交代で来てくれた。同じメンバーが来てがんばってくれたので，信頼関係ができた。ただ，行政でも市・県レベルでは情報がなかなか伝わらず，最初もどかしい部分もあった。またＮ県の医療班が１月27日から，１チーム10名くらい，１週間交代で来てくれた。それまで職員が車で病人を病院へ運んでいたので，助かった。　１月末頃からは，組織的なボランティアも来てくれた。Ｗ大学の学生グループと，Ｎ県のボーイスカウトのリーダーグループ（成人男性）が来て，引き継ぎも組織的にやってくれた。個人ボランティアも２週目頃からいろいろと来たが，最初の頃は日替わりの人が多くて，説明に時間をとられた。対応に気を使わせる人もなかいた。後では区役所とかけあって，定期的に安定して来てもらうようにした。その他，東京在住の息子がパソコン通信で事前に情報を伝えてくれたのも，迅速なやりとりで役に立った。

学校再開への取り組みと避難所

学校の再開に向けて，１月23日より随時校区への掲示をして行った。３年生の進路に関する仕事などがあって，２月１日に３年生をまず集め，２月６日からは１，２年生の授業も部分的に再開した。しかし，避難者への対応が第１と考えたので，変則的な時間割を工夫し，生徒には時間をずらして登校させるようにした。避難者は比較的安全な体育館に移り，“おそるおそる”校舎の教室（図書室，家庭科室など）を使用した。グランドには余地がなかった。生徒数が240名あまりの小規模校なので助かった面がある。しかし，全校生徒を１度に集めることは難しく，ようやく２月18日に，近くの幼稚園の集会所を借りてやっと全校生徒（といっても約半数）が一堂に会した。体育館は避難者がいるので，卒業式には使わない方針とした。区内の消防署の副署長にお願いし，全国から集まっていた消防士の仮眠場所になっていた消防署４Ｆのスペースを半日

だけ空けてもらって，卒業式と入学式をした。避難者には１人暮らしの人や高齢者が多かったこともあって，無理に「空けてくれ」とはどうしてもいなかった。４月の新学期以降は，授業時間数の確保に向け，こわれていない本館校舎の特別教室を普通教室に転用した。またプレハブの校舎も建てた。これは夏頃に完成した。グランドは車やテント，瓦礫などのため長い間３分の１くらいしか使えなかったが，２学期以降はほぼ使用可能になった。

避難所と学校，地域と学校の関係について

学校が避難所の運営にかかわることは，あのような大規模な震災に直面すれば，ある意味で当然と思う。教職員は，自らの被害があったにもかかわらず，よくがんばってくれた。しかし，学校は公共の建物であり災害時は避難所になるとはいえ，子どもたちにとっては勉強の場を失うことになるのが，教員としてとても心が痛む。いまの学校は不登校など問題をかかえているかもしれないが，それでも子どもたちには「学校に来るように」といつもいってきた。それが地震のときには「まだ来なくてよい。待っていなさい」といわなくてはならず，それがつらかった。

なお，中学校の性格として，地域ではまず居住地に近い小学校に行く人が多い。小学校は「地域でまもってやる」という雰囲気が強いが，なか学や高校は小学校に比べるとそれが弱い。しかし，それでもなお「地域のなかの学校でなければならない」という思いはある。地域とのふだんからのつながり，地域活動をしている人とのコンタクトがあれば，そして小学校－中学校のつながりがあれば，地域活動をしていてまず小学校に行った人も，その後に中学校にも来てくれる。地域とのつながりが生きてくる部分がある。Ｄ中学校の場合には，地域の（地縁的な）つながりが強く，学校に愛着をもっている人が多かったと思う。小学校が落ち着くと，ＰＴＡの人たちも助けに来てくれた。

避難所のリーダーに求められるもの

第１に，決断力が大事。学校の場合には，校長が自ら責任をとって判断できる部分が多いからでもある。第２に，率先垂範，自らいい，自ら動くこと。Ｄ中学校の場合には，教頭か校長のいずれかが必ず宿泊しいつでも対応できるようにした。その場ですぐに判断をし，連絡事項や相談されたことなど，できる限りすべてを知っておく。情報を集約しておくことも必要。

第５項　○○中学校（神戸市中央区）　教頭（男性）

この中学校は中央区に位置している。社会階層は様々な人が住んでいる地域である。これは，１９９７年７月３１日に調査したケースであり，面接時調査対象者は須磨区の教頭をされていた。

避難所開設の状況

避難所の開設されていたのは，1995年１月17日から６月末までである。教頭自身が学校に着いたのは，朝の11時すぎであった。水道が破断していたので止めた。職員が６人きていた。その時点では避難者は５，６名程度であった。校長も来ていたが，避難者が少ないので自宅（全壊）に戻った。職員室の整理をした。夕方にかけて避難者がどんどん増え，体育館がいっぱいになって行った。このままでは暴動が起こるかもしれないと判断し，ハンドマイクで演説した。「ここは学校です。私は避難者のお世話をする義務も気持ちもない。場所は貸すが，みなさんの世話は一切しない。３日間はがんばるが，水も食料もない。こういう状況では，絶対的なリーダーを選ばなくてはなりません。みなさんで決めてください」と被災者に告げた。しかし，決まらなかった。結局，被災者の方から，「100％いうことをきくから，先生がリーダーになってほしい」と申し出てきた。そこで，「私のいうことが最後の命令である」ということにして，リーダーになった。

運営の形態

夜11～12時に，連日必ず集会（＊後述の世話係による会）をもった。最初は教頭自身が判断を下していたが，３，４日してからはそれを避け，世話係会に対応させ，最終判断させるようにした。被災者からの立候補による世話係13名と，教職員全員を，自分の命令下において，避難所運営をスタートさせた。毎晩の世話係会では，自ら10分程度話して指示を出した。水や食料の管理（腐らないものはすぐに全部配ることはしない，タンクの水は２日目まで出さない等）など。３，４日してやや落ち着いてからは，自ら判断することを避け，世話係会に対応・判断させるようにした。世話係が被災者の要求をきくようにした。朝晩集会を開き，ミーティングを行った。貯水槽タンクの鍵は教頭が持った。また，職員室のなかに「災害対策本部」を設けた。盗難は四六時中あった。必要な「物」の確保につとめ，電池，バケツ等は隠した。このような非常時に必要な物資の管理には十分配慮が必要である。学校の正常化と避難所の運営は共存できたと思う。３月30日に，第２回の避難者総会を開いた。４月の段階で400名近く避難者がいたが，最終的に６月末には閉鎖となった。

運営の方法（理想論も含めて）

（１）まず，学校は，他の学校の教師に応援に来てもらいたい。教師でなけれ　ばわからないことはたくさんある。電話番だけでも２人は必要である。職員　室の出入りは，その学校の先生だけに止めたい。

（２）物をどう配分するかを考える必要がある。３日間もちこたえられるだけの水，食料，医療の準備が必要である。

（３）次に医療が必要である。

運営にあたっては，誠意をみせつつ，力のバランスを保つことが必要と思う。

ボランティアに関する感想

最初，名古屋からバイクで来てくれた人や，堺から自転車で来てくれた人などがいて，「自分にできる最大限のことは何か」を教えられた。

大学生の女の子で「ボランティアがしたい」といってきた人がいて，最初あてにしていなかったが，よくがんばってくれた。外部ボランティアの受け入れには，気を遣った。あまり働かない人もいた。東京の方の大学の先生が，学生を連れて「カウンセリング」をしにきた。たいへんな状態なのに，腹が立った。「できるもんならやってみろ」という感じで避難所をみせた。何もできずに，帰って行った。

第６項　　小学校（中央区）　校長（男性）

1997年７月に聴取した内容を，整理して記述する。

避難所開設時の状況

地震の当日は，避難者が校門を乗り越えて学校に入っていた。学校職員としては，教頭が７時すぎに学校の玄関ホールを開いた。避難者はまず玄関を通って体育館に入った。校長が学校に入ったのは，９時前だったが，それから学校に泊まり込み，家に帰れたのは１月30日であった。当日の避難者数は800人であった。避難者がもっとも多かったのは19日20日の，1500人だった。17日から20日までは，私と教頭と男性職員２人が避難者に対応し，外部からの問い合わせや避難者の教室への割り振りなどを行った。21日以降はほかの職員が出勤できたため，交代で運営するようになった。物資の数が足りず，種類がバラバラで食事のトラブルが多かった。トイレの掃除もたいへんだった。また，２月初旬に医療団のボランティアが来るまでは，昼の医療団の巡回はあったが，夜に病人が出たときなどに苦労した。浮浪者や防犯問題も発生したが，警察が巡回に来てくれた。マスコミの取材によるトラブルはとくになかった。行

政や教育委員会へは電話連絡がとりにくく，指示系統も統一されていなかったため，指示内容が混乱していた。

運営の交代

避難所の初期には，校長が避難所の代表者となり避難所を運営したが，後半は避難者の自治組織が運営した。27日には部屋ごとに１人ずつ連絡係を決めてもらった。29日に水道が通じてから，トイレの水くみや掃除をきっかけに，自治活動がはじめった。16人の避難者の代表と私（校長）や教頭が会合を持つようになった。この自治組織で，避難所の運営ルールを決めた。たとえば校舎内は禁煙とし，喫煙所のみで吸う，消灯は10時，カセットコンロは一定の場所で使用するなどのルールを決めた。１月30日に外部のボランティア組織が炊き出しや教員の補助のために，常駐してくれるようになった。２月以降は，避難所連絡会ができ，避難者の代表が出席して，情報を得るなどの活動に替わって行った。２月初旬に初めて児童を集めた。それから児童を２部に分けて臨時登校させ，中旬からはプレハブ校舎で，２部に分けて授業を再開した。３月24日の卒業式のために，避難者の代表者会が避難していた体育館を空けることを決め，式の前に体育館からプレハブ校舎へ移動してくれた。その後新学期のために，普通教室も空けてもらった。避難所が解散したのは，避難所が統合された８月25日である。

避難所運営に関する意見

今後の災害における避難所運営に関しては，避難した人をよく知っている自体会の人と学校が共同運営をすることが望ましいと思う。

第７項　小学校（中央区）　外部ボランティア（男性）

避難所となった場所は，中央区の東側に位置している。この避難所は６項でこの学校の校長が避難所運営を述べている。同一場所を異なる立場からみている点で貴重と思われる。1995年２月12日に調査したケースである。リーダーとなった人は，外部のボランティア団体の人で，この団体は通常海外のボランティア活動を行っている。

避難所の現況

収容者の人数はおよそ300人（１月末）。水道は早い時期に復旧，ガスは復旧せず，電気は早い時期に復旧，電話は早い時期に復旧した。避難所本部の構成は，ＮＧＯのボランティア団体が50人ほど常駐している。学校の教頭先生は入院中である。職員室が本部になっており，教師も数

名常駐している。

リーダーとなった経緯

この外部団体のリーダーは，地震後しばらく様子をみていた。報道ではボランティアは足りていると報道していたが，試しに来てみるとひどい状態で，1度帰り再度来た。とくにひどい状態であると判断したのは，避難所間の連絡がなく，一方の避難所ではあまっている物資が，他の避難所では不足していた。これは，通常行っている海外ボランティアのノウハウが生かせると思い，1度本部に戻り体制を整え，再び神戸に来た。

運営の形態

この外部ボランティアの特徴は，まず3から4人を1週間のサイクルで泊まり込ませ，その3，4人は次の人々に十分引き継ぎを行った上で，1度本部に戻らせるというシステムをとっている点である。その方が，社会人のボランティアは参加しやすいし，本部に戻りしばらく職場に復帰したり，休養することができる。これは海外におけるボランティアで得られたものである。また，外部のボランティアとして，学校の職員は学校の仕事や生徒の対応にあたる，避難者基本的には自分たちで自治を行う。外部のボランティアはその手助けをする。自分たちは，ボランティアのコーディネートを行うとともに，避難所間の物資の調整のために連絡をとる，などのことを考えていた。この団体は本部と4つの支部を現地におき，たえず連絡をとりあっていた。また，避難所に自分たちが留まるのは1ヶ月が限度と考え，その方向ですべてを動かして行く。基本的には，避難所は住民が自治できるようにもって行くことが必要である。自分たち（このリーダー）としては，混乱期に避難所をコーディネートし，被災者の方が自治できると判断したときに引き上げるのが適当と考えている。

第9項　○○いこいの家（神戸市中央区）　住民（女性）

これは，1995年2月12日に調査したケースである。避難所となった場所は中央区の中心部に位置し，従来は避難所に指定されていなかった場所である。

避難所の現況

収容人数はおよそ60人であり，小さな子どもから老人まで入所している。区にはこちらからここを避難所としてもらうよう交渉した。そこでやっと救援物資が届くようになった。

リーダーとなった経緯と運営の形態

最初は違うところにいたが，知人にいわれ開けに来た。その気持ちの背景には，いつも自分が活動していた場所であるので様子が心配であったこともある。区から鍵を借りて場所を開け，避難者に入ってもらった。公的機関との交渉はすべて本人が行う。自分はいつも人に頼られる，と自己分析している。最初はパニック状態であったが徐々に落ち着きをみせるようになった。運営の方法としては，物資等の管理はしているが，避難者の自主性に任せている。運営方針としては，荷物は持って来させなかった（荷物を持ってくることは原則禁止）。避難者にはここから出て行ってもらう方針で臨んでいる。

公的機関との関係

自衛隊などはここには来ない。県・市・区の人が代わる代わる来る。警察・消防は夜中にも来る。市から指定してもらったがここの管理運営委員が連絡不通で，現状ではどうしようもない。行政との関係ではとくに不満には思っていない。人数が減る度に行政には逐一報告した。そうしないと，無駄な物資が運ばれてきてしまう。

ボランティアとの関係

外部ボランティアが来ており，直接避難者と交渉してもらっている。荷物をもってもらったり，身障者の手伝いをしてもらったようだ。ただし，多くの人がやって来たので，対応に疲れた。

避難所を引き払われた時期

1995年6月で，その理由は自分が仮設住宅に移った。他の避難者は学校に移る。そのときの感想は，他の被災者の方には自立してもらいたいと思った。現在は仮設住宅に入居しており，今年中に自宅が修復するのでそうしたら，自宅に戻る。ここの避難所になった場所には仮設から頻繁に来ている。

避難所の規模による違い

避難所の大小によって過ごしやすさに差があったかどうかに関しては，避難所として指定してもらったので，とくに差はなかった。小さい避難所であったが，食料の配給等見逃されることはなかった。

第11項　外部ボランティア　男性

このケースは外部からの医療ボランティア（団体）で，サブリーダーである被面接者は41歳の男性である。1997年８月９日に現住地で調査した。

震災時の活動内容

1995年１月17日８時前にＴＶをみて飛行機で高松から岡山から長田へ行った。トラック隊が出るため出た。２次隊として１月18日23時半すぎ，岡山から山陽道三田経由で長田区役所へ入る。１次隊が１７日夜に着いた。物資を持って行こうとしたが中止した。現地に入るときには警察が誘導した。神戸市西病院が岡山大の出張病院だった。機能停止していた。

22日（日）に岡山経由で東京へ１度帰った。現地は足元が暗く危険であった。混乱を避けて（停電中），５月に再び現地に入った。保健所，巡回診療を行った。

避難所（待機所）とのかかわり

長田区だけで毎日４～５ヶ所の避難所を毎日巡回診療をした（サブリーダー）。保健婦と保健所職員を含め車で回った。避難所に関しては，リーダーがしっかりしているところと違うところがあった。組織が自主組織があるところとないところがあった。リーダーがいれば「保健所の人が来た」と呼びかけてもらった。問題であるのは翌日来るまでの間をどうするかということで，看護婦経験者を募った。法律的なものがあり，保健所へまず行った。保健所は，情報はもっていた。

ボランティアの実際

はじめは避難所が何ヶ所あるかわからなかった。１つのＮＧＯでは独占しなかった。お互いに，車やスタッフをどのくらい出せるのかミーティングした。この団体の車は４台。入札式（国連方式）で職員が車で診療に行った。この団体は２週間で引き上げた。医療機関は，水の配給を優先され，電気も優先され，早めに回復した。地元医療機関の外来７０％，入院５０％が復旧したところで引き上げた。△△は，医療機関の診療が５０％復旧したら引き上げることに決めてある。緊急医療ははじめの３日間行う。４日目からは縫ったり切ったりはない。高レベルのことはできない。その後は，集団生活での食中毒・感染症の問題がある。５～６日目くらいからは慢性成人病，てんかん，心臓，糖尿病（血糖値を計る）等をみた。薬の合う合わないという問題があった。地元の医療機関も治療再開をしないといけないため元の先生に戻す。10日目くらいから診療が再開されてきた）から，発災前の医療体制に戻るまでの手伝

いをする。やはり地元の問題だから，地元の医療が立ち上がるまでやる。開業病院情報は，保健所から入ってきた。カルテをつくり，ミーティングをした。薬は出した。薬剤師を集めチームをつくって行った。保健所の人に，保管・管理は保健婦にあずけて，次の日行くところの分を分けた。チームを分けて分担，医療ボランティアにも協力してもらった。医療のあり方として「べきだ論」はあまり考えない。具体論のつみあげである。モア・ベターという考え方をしている。

運営に関する一般的な印象

全体として医療ボランティアとのコミュニケーションはできている。各避難所については，医療福祉，災害弱者の面倒をみているところとみていないところがあって，組織化してやっているところと全くやっていないところがあった。コミュニティーのなかの自治能力があるかどうかに違いがあった。学校の先生も千差万別である。教員の職務でないという人もいたし，面倒もみる人もいた。学校はハード面で水・トイレはある。放送セットはある，情報が被災者に伝わる。調理施設もスペースもあるが，公民館にはそれがない。ソフトでは，先生は運営に関して，建物の保守や人の世話を組織的にする感じだった。公民館には常駐の人がいなかった。

運営に成功していたところと，失敗していたところの事例

幼小中の先生は7割くらいの避難所では，かかわっていた。うまくやっているのは3割くらいであった。先生はタッチしないところもあった。初期は先生方がやっていた。

国際緊急医療3原則として以下の3点がある。

（1）誰でも人を助けたいという気持ちがある。
（2）国や部族などはない。
（3）援助を受ける人にもプライドがある。